

# コミュニケーション

communication

No.106

2023年9月1日号



開園50周年記念号

ありがとう50年

～つながり、ともに未来へ～

ちょうどいいから  
住みやすい!  
秋田市  
LIFE  
市民と広げるまちへの誇りと愛着



あきぎん 大モリンの森

1973年の開園から大森山にいる  
チンパンジーのポンタ



## ごあいさつ

秋田市長 穂積 志

大森山動物園は、ここ大森山に開園して今年9月1日で満50歳の誕生日を迎えます。

大森山動物園は、観光施設であるだけでなく、子どもたちの豊かな感性を育む教育の場や、繁殖活動を通じて希少動物の種の保存を担う場として、多様な役割を果たしており、この大きな節目の年を迎えることができましたのは、ひとえに動物園を愛する皆さまのご理解とご支援の賜であり、心から御礼申し上げます。

大森山動物園としての歴史は、千秋公園にあった児童動物園が大森山に移転した1973年から始まりました。1991年には市政100周年記念事業として、ゾウとキリンの導入が実現し、その年は過去最高の来園者数35万人を記録しました。

その後も「チンパンジーの森」や「王者の森」など、ハード面の拡充を図るとともに、「まんまタイム」や「どうぶつ解説」などのソフト面でも、来園者楽しんでいただくための創意工夫を重ねたほか、動物園と公園の一体的な整備を行うなど、大森山全体にぎわいづくりのため常に新しい挑戦を続け、2022年には累計入園者数が1,200万人を超えるなど、大森山動物園は東北を代表する動物園のひとつとして成長してまいりました。

これからも、大森山動物園は開園50周年のテーマ「ありがとう50年～つながり、ともに未来へ～」の言葉のとおり、これまで支えていただいた多くの方々への感謝の気持ちを常に忘れずに、皆さまとのつながりを大切にしながら、60周年、70周年の未来へと羽ばたいてまいります。皆さまにおかれましては、今後も変わらぬご愛顧とお力添えを賜りますようお願い申し上げます。



## 祝辞

秋田市議会議員 菅原 琢哉

大森山動物園の開園50周年、誠におめでとうございます。

1973年に秋田市中心部の千秋公園から大森山に移転して以来、動物園は、観光・教育そして種の保存の場として、半世紀もの長きに渡り、その重要な役割を果たし続けてこられたことに対し、市議会を代表して敬意を表します。

この50年の間に、ゾウやキリンなどの人気動物の導入や各展示場等の整備に加え、「まんまタイム」などのイベントや「大森山アートプロジェクト」などの新しい取り組みを試行錯誤しながら企画・開催することで、現在の動物園が作り上げられたことは感慨深いものがあります。中でも、短い命を力いっぱい生き抜いた、2002年の義足のキリン「たいよう」の物語は、後世に語り継がれていくものと思います。

動物園内には様々な樹木や草花が生い茂り、自然の沼「塩曳潟」は希少なゼニタナゴの保全池となっているほか、約70haにおよぶ豊かな自然の大森山公園と一体となった、まさに緑に包まれた森の動物園として、秋田市民はもとより県内外から多くの人々が訪れる憩いの場となっております。

また、「自然および命の大切さを学び、動物の命をつなぐ場」を大森山動物園条例の理念に掲げ、学校教育とも連携した「ふれあい教室」や「飼育作業体験」などを実施しているほか、希少なニホンイヌワシやユキヒヨウの繁殖に成功するなど、種の保存にも取り組んでおり、動物園の果たす役割はますます重要となってきたものと考えております。

市議会といたしましても、開園以来、動物の飼育展示や施設の拡充整備に努めてこられた市当局、並びに地元の皆さまをはじめとする多くの支援者のご尽力とご労苦に対し、感謝を申し上げますとともに、50周年を契機として、大森山動物園がこれまで以上に市民から愛される動物園となることを心から祈念申し上げ、お祝いの言葉といたします。



## 記念誌発行にあたり

園長 小松 守

大森山動物園は1973年の開園から50年の歩みを刻んでまいりました。この半世紀は、人の価値観や社会の意識が大きく変わり、少子高齢化とともに地方の人口減少が始まり、経済の不安定さ、さらには地球環境の変化を象徴する野生動物の絶滅など、動物園を取り巻く環境が大きく変化した時代だったといえます。

このような変化が激しい時代にあって動物園が守られ、成長し続けることができたのは、大森山動物園を市民の大切な財産と認めてくださる多くの人々、動物園と様々に関わってくださった方々、そして1,200万人を超える来園者の皆さまに支え続けられてきたからです。そして動物園を楽しみに来園される人々の期待に応えようと懸命に努力してきたその時々スタッフ、生きる姿を人々に披露しながら何かを伝え、教え、感動を与え続けてくれた数多くの動物たち、こうした力の集結があったからといえます。現場にいて動物園を48年間見続けてきた者として、このことを強く感じます。大森山動物園はこうした様々な思いが積み重なって築かれてきたのです。

本誌コミュニケーション106号は、86号の開園40周年号と同様に50周年記念号として編集し、動物園が歩んできた記録の整理保存とともに、次世代を担う若いスタッフに未来を展望してもらいました。

秋田の動物園の未来を切り拓くために、そして、秋田の動物園を支えてくださった方々に感謝の心を込めて。

### 千秋公園から大森山公園へ

秋田に初めて動物園ができたのは戦後すぐの1950年のことでした。この時代、全国で動物園があったのは大都会の東京、京都、大阪、名古屋のほか地方では数園程度しかない時代でした。

秋田県は1947年の児童福祉法制定を受け、全国に先駆けて千秋公園に児童会館の設置を計画しました。その頃、国内では戦後の子どもたちを元気づけようと1949年にインドから平和の使者として上野動物園にゾウのインディラが贈られ、翌年には北日本でゾウ列車の運行が計画されていたようです。

1950年8月、秋田県は子どもたちの明るい未来のためにと、千秋公園に児童会館と児童動物園をオープンしました。同時に児童文化博覧会も開催し、千秋公園にそのインディラもやってきました。8月1日から25日間の来場者数は30万人にも達し、国鉄は秋田駅行き臨時列車を走らせたそうです。当時の県人口は約130万人ですから、ほぼ県民の4人に1人が来場したことになります。

その後、1953年に千秋公園の管理が秋田県から秋田市に移管され、動物園も市立児童動物園となりましたが、街の発展の中で様々な課題も抱えるようになっていました。

秋田市は1956年の都市公園法の成立を受け、人間形成と子どもの心を育むことをテーマに公園整備を検討、市制80周年の1969年には秋田市南西部の現在地、大森山に「こどもの国」建設計画を決めました。整備の目玉は動物園で、1971年には将来的にゾウも含めた121種740点を保有する動物園の建設計画が発表されています。

千秋公園の児童動物園は1973年8月10日に閉園し、同月15、16日に動物等の大移動が行われ、9月1日に大森山公園と動物園が華々しく同時開園となりました。広さは児童動物園の約20倍の8ha、実際の展示動物は93種約280点と計画通りではありませんでしたが、当時の市民は大いに高揚し、冬期閉園までの約3か月の入園者数は約12万6千人にも上りました。

また、大森山公園には動物園とともに、宿泊研修施設である「大森山少年の家」なども設置され、公園や動物園づくりで子どもを育みたいという先人の思いが伝わってきます。

(動物園の歩みは8ページからの特集をご覧ください)



児童文化博覧会にやってきたゾウのインディラ



児童動物園の入口

# 大森山の仲間たち

令和5年時点の飼育動物(一部)





ニシアメリカオオコノハズク



トナカイ



ケヅメリクガメ



アカカンガルー



ツキノワグマ



コーンスネーク



スバルバルライチョウ



シロフクロウ

ワシミズク



ホンドテン



ニホンコウノトリ



カナダヤマアラシ



アミメキリン



コモンマーモセット



カピバラ



キバタン



チンパンジー



ダンチョウ



ホッキョクオオカミ



シュバシコウ



ノドジロオマキザル



アビシニアコロブス



オオバタン



グリーンイグアナ



エミュー



カリフォルニアアシカ



イワシヤコ



アムールトラ



エリマキキツネザル



ホシガメ



アカコンゴウインコ



ウサギ(ロップイヤー)



ゴツメカワウソ

飼育動物数 (2023年6月末現在)

哺乳類	49種類	338点
鳥類	24種類	118点
爬虫類	13種類	27点
両生類	3種類	4点
魚類	3種類	21点
無脊椎動物	1種類	23点
合計	93種類	531点

# 年表で振り返る大森山動物園の50年

## 1973→1983

1973 ● [9月1日]大森山公園・動物園開園



開園セレモニー

- 1975 ● 動物園夏まつり開催
- 第1回サマースクール開催
- ライオンズクラブから野外ステージが贈られる



第1回サマースクール

- 1976 ● 園内に遊園地オープン
- 1977 ● シマウマ、ツル導入
- 1978 ● 第1回写生大会開催
- アカカンガルー導入
- 1979 ● ダチョウ導入
- メンフクロウ繁殖(繁殖賞受賞)
- 1980 ● ブラジル・サンパウロ市から親善動物バカが贈られる
- 1981 ● サル山オープン(京都府宇治田原町から二ホンザル33頭を導入)



サル山完成後

- 1982 ● 友好都市・中国蘭州市から親善動物フタコブラクダが贈られる
- 1983 ● タンチョウ導入(開園10周年記念事業)
- ジャイアントパンダの剥製を展示(開園10周年記念事業)

## 1984→1993

- 1984 ● オスのタンチョウを導入
- 1988 ● ふれあい教室スタート
- ブラジル・サンパウロ市から親善動物コモンマーモセットなどが贈られる
- 1990 ● 大型動物舎建設用地造成工事完了、大型動物舎建設工事着工(市制100周年記念事業)
- 南アフリカ共和国からゾウ2頭を導入(市制100周年記念事業)



アフリカゾウ搬入

- 1991 ● 情報誌「コミュニケーション」発行開始
- 大型動物舎完成(ゾウ、キリン舎)
- 大型猛禽舎完成(イヌワシ舎)
- 東京都多摩動物公園からキリン3頭を導入
- ゾウ、キリンを公開



来園時のキリン

- 冬の動物園観覧会スタート
- 1992 ● 水禽池完成(大型フライングケージ)
- 1993 ● 開園20周年記念式典開催
- 夜の動物園スタート
- 小型鳥類舎完成(インコ舎)
- キリン繁殖

## 1994→2003

- 1994 ● シロイワヤギ繁殖
- ホンドテン繁殖(繁殖賞受賞)
- 1995 ● アネハツル人工授精で誕生(繁殖賞受賞)
- ユキヒョウ繁殖
- 1996 ● ワシミミズク導入
- チンパンジー繁殖(人工哺育)

1997 ● ふれあいランドオープン



ふれあいランドオープン

- レッサーパンダ、カピバラ導入
- カリフォルニアアシカ繁殖
- 1998 ● アビシニアコロブス繁殖
- 九州自然動物公園からキリンのオス「ジユン」が来園
- 1999 ● ラマ、ケツメリクガメ導入
- 2000 ● シフゾウ、ビーバー、ヤマアラシ導入
- 2002 ● チンパンジーの森オープン
- 年間利用券(通称パスポート)販売開始



- 義足のキリン「たいよう」が話題になる



キリンのたいよう(左)

- ボランティアガイド「たいようの会」発足
- 2003 ● ロゴマーク決定・披露
- 開園30周年記念式典開催
- 猛獣舎「王者の森」オープン



「王者の森」オープン

- ガーデンボランティア「MYZOOガーテナー」発足
- イヌワシ初繁殖
- 園内にてゼニタナゴの生息を確認(公表)
- 大森山少年の家閉所

## 2004→2013

- 2004 ● ツキノワグマ、ペンギン、ワシミミズク繁殖  
 2005 ● まんまタイム、エサやり体験開始



まんまタイム

- 2006 ● 大森山動物園条例施行  
 ● 愛称を「ミルヴェエ」と決定  
 ● 雪の動物園スタート



雪の動物園

- 2007 ● 研修ホール・管理事務所「ミルヴェエ館」オープン  
 ● 軽食コーナー「森のこまち」オープン  
 ● 大森山遊園地閉鎖

- 2008 ● 動物健康管理センター「森のびょういん」オープン



森のびょういん竣工式

- 大森山ゆうえんち「アニパ」オープン  
 ● アムールトラ繁殖



アムールトラ繁殖

- 2009 ● 大型遊具「アソヴェの森」完成（日本宝くじ協会の事業を活用）



アソヴェの森

- 大森山自然動物公園整備構想策定委員会開催  
 ● 日本動物園水族館協会総会を初めて秋田市で開催、総裁の秋篠宮殿下が大森山動物園をご視察



秋篠宮殿下、イヌワシを間近に観察

- 2010 ● 大森山自然動物公園整備構想発表  
 ● アニマル戦隊ミルヴェンジャー7が誕生

- 2011 ● 南米小型サル舎「さるっこ」オープン  
 ● ニホンコウノトリ繁殖（日本最北）  
 ● 大森山動物園応援会発足

- 2012 ● アカコンゴウインコ人工繁殖  
 2013 ● 秋田公立美術工芸短期大学生制作によるロゴマーク、イメージキャラクター「オモリン」を発表



ロゴ・キャラクター発表会

- 開園40周年を祝う会開催  
 ● 鶴岡市加茂水族館、男鹿水族館 GAOとの「東北日本海動物園・水族館連携(3園館連携)」を開始  
 ● エンリッチメント大賞受賞(キリン)

## 2014→2023

- 2014 ● ビジターセンターオープン



ビジターセンターオープン

- ウェルカム動物舎オープン  
 2015 ● 高木美保さんが名誉園長に就任  
 ● 総入園者数1,000万人達成  
 ● 秋田公立美術大学とのプロジェクト「Arts & Zoo」スタート（現：大森山アートプロジェクト）  
 ● 環境省イヌワシ保護増殖事業の確設施設となる

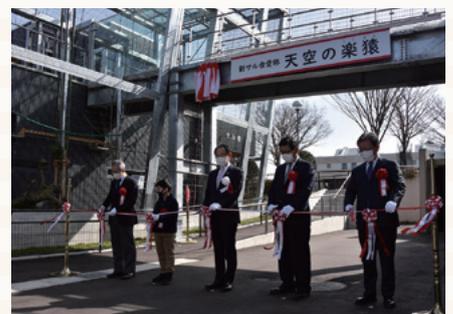
- 2016 ● ネーミングライツ「大森山動物園～あきぎんオモリンの森～」(パートナー企業：株式会社秋田銀行)を導入  
 ● 園内に無料の公衆無線LANを整備  
 ● 高病原性鳥インフルエンザ発生

- 2017 ● 鳥インフルエンザ対策として隔離飼養施設およびイヌワシ繁殖保全棟等を整備

- 2018 ● アフリカゾウの繁殖に向けて仙台市八木山動物公園、盛岡市動物公園と連携した取り組みを開始

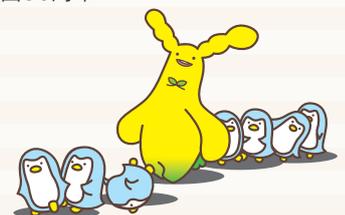
- 2019 ● 野生動物保護功労者環境大臣表彰(イヌワシ)  
 ● エンリッチメント大賞受賞(トナカイ)

- 2020 ● 動物専門員の採用がスタート  
 2021 ● サル舎「天空の楽猿(らくえん)」オープン



「天空の楽猿」オープン

- 大森山公園整備基本計画策定  
 2023 ● 開園50周年



# 大森山動物園、半世紀の歩み

8ページから19ページまでは「大森山動物園、半世紀の歩み」として、48年間動物園に在籍した者の見方になりますが、園の足跡とともに園の存在意義を高め、また、成長するうえで重要な役割を果たしてきたものをいくつかの項目に分け、できるだけ客観的にまとめてみました。

園長 小松 守

## 動物園づくり、50年の歩み



開園を待ちわびた人々にぎわう園内(右手前はアシカ舎、奥は入園ゲート)

大森山動物園は児童動物園を引き継ぎ、50年の時を刻んできました。この間の成長と動物園づくりの歩みを前半と後半に分けて概観してみます。

前半の25年は今の動物園のカタチをつくった時代でした。1973年9月1日に開園し、入園料は大人20円から100円、子どもは10円から30円と大幅に値上げしましたが、その年の11月23日までの入園者数は約12万6千人、翌年も約27万8千人の入園があり、市民の期待の大きさが分かります。

しかし、開園の盛り上がりは長続きせず、後の年間入園者数は20万人台前半で推移します。その理由の一つは展示内容の貧弱さにありました。展示動物は児童動物園から引き継いだものを含め93種類約280点で小型鳥類が多く、物足りなさがありました。その対応として、シマウマなど新しい動物を次々に導入し、1981年にサル山をオープン、翌年には中国蘭州市から寄贈されたフタコブラクダを展示するなど努力が続けられました。新規動物導入が一段落した開園10年を過ぎた頃には、入園者数が年間20万人を下回ることもありました。



1977年 シマウマ導入



1982年 フタコブラクダ来園

その後、市民からの要望もあり、秋田市は1989年3月、ゾウとキリンの導入を市制100周年記念事業の一つとしました。園南側の山を切り崩した約8,000㎡の土地造成や



1990年 アフリカゾウ来園

動物舎建設を進め、南アフリカ共和国からゾウ2頭を輸入するとともに多摩動物公園からキリンを3頭導入し1991年春に展示を始めました。動物園の歩みの中でとても大きな節目の事業でした。この年の入園者数は約35万人で50年間この記録は破られていません。また、事業費確保のため入園料を200円から400円に値上げし、動物園は特別会計を設定しました。

動物園づくりはさらに続き、人気の高かった動物ふれあいサービスの充実を図ろうと、1997年、園地を西側に約1ha拡大、レッサーパンダも仲間入りし「ふれあいランド」をオープンしました。大人料金を500円に改定した一方で、子ども入園料無料化がこの年から始まりました。この整備で現在の動物園のカタチがほぼ完成しました。



1997年 ふれあいランドオープンに合わせて仲間入りしたレッサーパンダ

1998年以降の後半25年はカタチの維持と再整備、前半に蒔いてきた種を育て発信力を高めながら多様なニーズに応えることで、動物園の存在意義を高めた時代ともいえます。



1995年 ユキヒョウ繁殖

飼育動物数も増え、蓄積した飼育経験や知見、飼育技術は希少種の繁殖につながり、全国的にも注目されました。飼育とともに展示の重要性を意識し、1999年には「飼育係」を「飼育展示担当」に名称を変更しました。

2002年は義足のキリン「たいよう」の物語が地方紙の年末10大ニュースのトップに選ばれるなど、市民の動物園に向けた意識が大きく変化した頃でした。動物園では「青空シンポジ

ウム」や「明日の動物園を考える会」などが開催され、生命と向き合う動物園とその役割に関心が集まり、マスコミも注目しました。

秋田市議会からは動物園の存在を明確にすべきではとの質問が出され、秋田市は2005年12月議会で「秋田市大森山動物園条例」の制定を提案し可決されました。都市公園条例の別表に記載される一有料施設から、動物園の設置理念をうたいあげ、その存在意義を明示した重要な出来事でした。設置理念にある重要な語句は、シンポジウムの中で子どもたちが読み上げた作文の文言を生かしています。

2006年の条例施行でこれまで冬の観察会として開催していた冬期開園が正式に「雪の動物園」となり、1993年から夏に開催していた「夜の動物園」とともに季節の大イベントに成長、四季を通じた動物園サービスが始まりました。同時に動物園の愛称も公募され、2007年の春開園時に愛称「ミルヴェ」を発表、また動物園は人と動物が心を交わす場であってほしいとの願いを込め、大森山動物園のテーマは「動物と語らう森」となり、現在も継続しています。熱心なスタッフのアイデアは様々な展示の工夫や教育活動、「まんまタイム」や動物解説、エサやり体験など大森山の特徴的な展示サービスへと発展しています。

2000年代は、開園から30年経過した各施設の老朽化も見え始め、再整備が進められた時でした。開園当初からあった鉄檻とコンクリートの総合動物舎は、解放的な「チンパンジーの森」や植栽も鮮やかな「王者の森」に建て替えられ、動物園のイメージは大きく変わりました。野生動物の絶滅が叫ばれる時代、人々の動物や動物園に向ける意識も変化してい



2002年 キリンのたいようと父ジユン



2003年 イヌワシの自然繁殖に成功



2003年 青空シンポジウム



2005年 こどもシンポジウム



冬の観察会(写真は2003年頃)



入園ゲートで雪だるまがお出迎え

た時代でした。2007年には研修ホールを備えた管理事務所「ミルヴェ館」、2008年には動物の健康管理のための「森のびょういん」、加えて2009年には宝くじ協会の支援で大型遊具「アソヴェの森」が登場するなど再整備が続きました。

2012年に市の受益者負担見直しで入園料は700円となりました。この影響か年間入園者数は25万人台に落ち込みましたが、2014年の入園ゲート・ビジターセンターの新築、2020年のサル舎「天空の楽猿らくえん」の完成などは、利便性向上にも効果的で、県人口が92万人を割る近年でも入園者数は27~28万人で推移し、2022年8月に開園以来の総入園者数は1,200万人を越えました。ただ、2016年の高病原性鳥インフルエンザの園内発生や2020年からの新型コロナウイルス感染症など、新たな危機を経験した後半でもありました。

動物園は50年間、着実な歩みで発展成長を遂げてきました。それを可能にしたのは、園を楽しむ入園者、支援してくれる多くの市民、魅力アップを図ってきた園スタッフ、それぞれが「動物園は大切な場だね」と思う気持ちの集結によるものに違いありません。



2002年 チンパンジーの森完成記念式典



完成当初のチンパンジーの森



2009年 アソヴェの森オープン



2011年 さるっこさるっこの森完成



2015年 入園者1,000万人達成(ビジターセンター大屋根下で)



2020年~ コロナ禍でも試行錯誤してイベントを続けてきました

## 飼育展示の歩み

**動**物園の根幹は飼育と展示であり、それは動物の収集と飼育の実践からなります。50年間の飼育展示は、園の経営状況、動物の入手、飼育や展示の技術、飼育環境、来園者からの評価のほか、野生動物の絶滅や感染症など多様な影響を受けてきました。

1973年の開園時の飼育展示は8ページに記載したように物足りなさがあったようです。トラやチンパンジーなどを展示していた総合動物舎の当時の飼育環境は鉄檻とコンクリート床であることに加え、チンパンジーの隣室で猛獣が暮らすなど、今考えるとよい環境とはいえませんでした。飼育することで精一杯の時代だったのかもしれません。

展示内容充実のため、開園の数年後からシマウマ、カンガルー、タンチョウ、ニホンザル(サル山)など、動物の収集に懸命に力が注がれました。開園10年目の1983年には動物数は112種520点に増えました。

さらに市制100周年記念事業で1991年にゾウとキリンが加わり、開園20年目の1993年の動物数は110種533点となり、数字上の変化はあまりありませんが、大型動物の導入によって飼育状況は一変しました。飼育レベルを上げるため飼育の技術職員の採用もされ、作業量も大きく変わりました。1997年の「ふれあいランド」の完成で大型水槽でのペンギン展示、カピバラや希少種のレッサーパンダも導入され、現在の主な飼育動物がほぼそろいました。



大型水槽でのペンギン展示

動物収集のための動物の移動に関わる制約や規制は1990年頃まではそれほど厳しくなく、他園や動物商との動物交換や購入が盛んに行われていた時代でした。その後、野生動物の絶滅が広がり、ワシントン条約批准や種の保存法成立などが相次ぎ、動物収集は次第に難しい時代に入り始めました。日本動物園水族館協会(JAZA)は展示動物の入手困難な時代を見据え、動物確保と野生動物保全への寄与も意識し委員会を立ち上げ、1990年後半には飼育下での個体群維持などの議論を始めています。



初めて繁殖したカピバラ



開園当時の総合動物舎



ライオンやトラなどは檻越してした



総合動物舎で使用していた檻の一部はヒトの檻として人気の撮影スポットに

開園から30年目の2003年の動物数は125種556点と大きく増えました。飼育経験や技術の向上はシロイワヤギ、ユキヒョウ、キリン、チンパンジー、イヌワシなどの希少動物等の繁殖に結び付きました。

ところが、開園から40年後の2013年の数は107種657点と種の減少が見え始めました。さらに園内で2016年に発生した高病原性鳥インフルエンザは鳥類の飼育に大打撃を与え、鳥類が38種から27種に激減、2017年の飼育動物数は96種579点となりました。50年目を迎えた2023年4月時点の動物数は93種544点です。



暑さに負けず生きたシロイワヤギ



高病原性鳥インフルエンザ発生により園内を消毒

## 児童動物園から 飼育が続いている動物



ライオン



クマ

アシカ

イヌワシ

2000年代の動物飼育は、環境問題と生物多様性の低下が重要テーマとして取り上げられ、これを背景に動物園は生息域外保全の役割の一端を担うようになりました。飼育動物は動物園間での共有財産的な感覚も出てきています。動物数減少の評価はまだ定まっていませんが、動物園で継続し繁殖できない動物種は姿を消す時代になりました。動物園の存続にも密接に関わる将来的な種の継代(種の保存)に関わる収集計画は大きな視点で捉えていく必要があることを教えています。

さらに動物園の飼育は動物の幸せ、福祉の視点で捉えることも求められるようになってきました。開園から30年以降に改修した「王者の森」「チンパンジーの森」「天空の楽猿」などは、そうした生活環境改善を意識したもので50年前とは大きく変わりました。動物に向けた社会の意識変化です。このように飼育の役割が高まる中、秋田市は2020年に動物専門員の採用を始めました。

飼育種の歴史を具体的に見てみると、児童動物園から現在まで飼育が続いている種はライオン、カリフォルニアアシカ、ツキノワグマ、ニホンイヌワシです。さらに開園時から50年間継続して飼育されている種はトラ(亜種は変わるが)、チンパンジー、チリーフラミンゴ、フンボルトペンギンです。チンパンジーのボンタは開園当初から生き続け、子孫も残している大森山動物園の歴史を見てきた存在です。他にカンガルー、フタコブラクダ、ニホンザル、ノジロオマキザル、コモンマーモセット、ホンドテン、タンチョウ、マナヅルは40年以上、アフリカゾウ、キリン、トナカイ、ワオキツネザル、ミーアキャットは30年以上飼育が継続されてきました。これらは大森山の諸条件、環境にマッチした種といえるかもしれません。

これらの中で特筆すべきいくつかの種をご紹介します。

一つはニホンイヌワシです。1970年に鳥海山の麓で保護

## 大森山動物園開園当初から 飼育が続いている動物



フラミンゴ

ペンギン

チンパンジー



トラ

され児童動物園時代から飼育を継続しています。2003年には初めて繁殖に成功。その後も継続して繁殖し、50年以上も飼育している動物園は大森山だけです。繁殖個体は全国の動物園に分散されています。熱心な飼育員による人工授精の試み等の繁殖生態の解明、ローテーション育雛法開発でのヒナの育成率が向上し、人工育雛を活かした国内初の手乗りイヌワシの実践は普及啓発に貢献しています。2015年には環境省から保護増殖事業の確認認定証が授与され、2019年には野生生物保護功労者として環境大臣賞を受賞しました。JAZA内生物多様性委員会で当園はイヌワシの計画管理と猛禽類の事業調整を行っています。野生絶滅が危惧される中、秋田の動物園は野生復帰の場面の寄与も期待されています。



イヌワシの親子



イヌワシの模型を使って育雛する様子

キリンも大森山では特別な意識で飼育を続けてきました。多くの繁殖成績がある一方、健康管理が難しい動物で様々な苦い経験もしてきました。ハンドリングや診療等ケアの限界を感じた飼育員らがトライした「ハズバンダリートレーニング」は先進的な技術で全国の動物園から注目されています。このトレーニングにより採血等の検査や蹄ケアも可能になりました。2013年に市民ZOOネットワークからエンリッチメント大賞を受賞しています。



トレーニングによる蹄のケア



トレーニングで採血が可能に

このほか、国内動物園で初繁殖となったアナグマ、メンフクロウ、ジャッカル、ホンドテン、アネハヅルは生態解明にも結び付きJAZAから繁殖賞を受賞しています。

また、国内動物園で飼育数が減っているアフリカゾウの子孫を残そうと2018年には仙台市八木山動物公園との間でメスを交換し、繁殖を試みる大きな取り組みを行いました。しかし、大森山のだいすけの死によって子孫を残すことはできませんでした。



メンフクロウ



ジャッカル



アネハヅル



ホンドテン



2018年 仙台市八木山動物園、盛岡市動物公園との合同発表会

動物園飼育ではありませんが、2003年に秋田県自然保護課が県内各地のため池調査で大森山公園内の塩曳潟も調査し、絶滅危惧種の希少淡水魚のシナイモツゴとゼニタナゴが発見されました。それを機に秋田で淡水魚を研究する団体や地域の学校などと力を合わせ、ゼニタナゴの継続調査や園内展示などで保全啓発活動を20年間継続してきました。



花子(左)とだいすけ



八木山からきたリリー(右)とだいすけ

動物飼育と展示の継続には様々な苦勞と困難が伴いますが、そこで得た経験や知見、技術の蓄積は動物飼育と種の保存、さらに展示を通じた教育にも生かされ、野生や自然の理解、その保全にも結び付くものです。動物園の根幹にある飼育と展示は動物園の核心であり、存在意義といえます。



2004年 地元の小学生と一緒に塩曳潟を調査



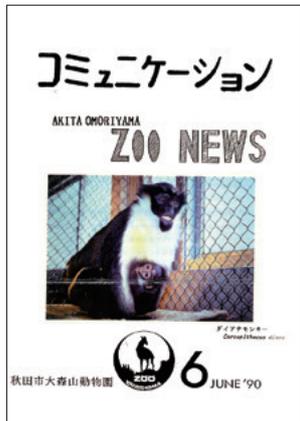
ゼニタナゴ

# 発信し続けてきた動物園

**大** 森山動物園には現在、企画広報担当があり情報の発信等  
を担っています。この担当ができたのは2002年でした。  
市役所には広報広聴課という専門部署がありますが、一部署  
に広報担当を配置したのは極めて異例と言えます。その経緯  
と活動の歩みを振り返ります。

展示内容の充実が進み、ゾウとキリンの展示を間近にした1990年頃は大型動物舎の工事も進み、園の成長を感じていたスタッフはどこか奮い立っていた時代で、今の動物園を伝えたいという思いが湧き起こっていました。発信手段が検討されましたが、今のようなインターネットの時代ではなく、ワープロも未発達、特別な財源もない中、できたことはチラシ的な情報誌の発行でした。そして誕生したのが情報誌「コミュニケーション」です。動物園と市民、人と動物との交流を願い、スタッフみんなで決めた名称でした。現代版の立派な印刷ではなく庁内印刷でのスタート、内容も未熟なものでしたが、現場感覚にあふれた誌面は好評でした。スタートから30年以上継続し2020年には100号を達成、この50周年記念号で通算106号を迎えます。各担当スタッフが懸命に取り組んだ現場での仕事、動物園の歩みが記録された貴重なものです。

1997年の「ふれあいランド」完成で動物園の注目度や人気はますます高まり、園の活動は次第に広がりを見せ、報道関係等との調整などの仕事も増えていきました。動物園経営には現場感覚での情報発信が不可欠であり、情報の加工や出し方などの仕事は重要さが増す中、2002年に普及的な仕事も含めた普及企画を担当する職員を配置しました。この年はあの義足のキリン「たいよう」の出来事もあり、新担当は大変忙しいスタートとなりました。



1990年 6月号(第1号)



1992年 No.1号



2020年 No.100号

普及企画担当は2012年からは企画広報担当に名称を変え、広報とともに営業企画、企業やマスコミ等との対外折衝など幅広い業務を担う動物園営業の最前線業務を展開するようになっていきます。ネット時代の情報発信はホームページや、SNS等も盛んになっていますが、原点にあった情報誌「コミュニケーション」制作は記録保存と動物園活動の普及という重要な役割を担っています。保存された記録は、各種活動の後の検証でも重要な意味を持つものです。

動物園活動の発信がより一層盛んになる中、別の角度から発信してくれる方が登場しました。タレントの高木美保さんです。2015年春、縁あって名誉園長にご就任いただき、2023年春までの8年間、いろいろな機会に動物園にお越しください、来園者と明るい笑顔で親しくふれあっていただき、これまでの情報発信とは違った空気感を発信してくださいました。

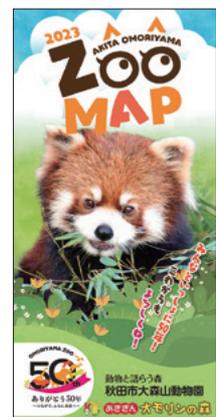
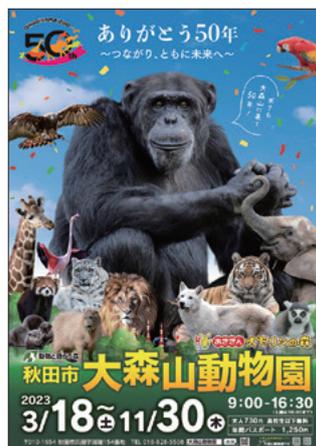
様々なカタチでの情報発信は、市民の大森山への関心を引きつける一つの力となってきましたが、動物園を伝えたいという原点を見失うことなく将来も展開していきたいものです。



2015年 高木美保名誉園長 就任式



高木名誉園長と来園者とのふれあい



ポスターや園内マップの作成も

## 教育活動とサービス

**動**物園は、動物の姿や生態の展示を通し、動物や自然、生命の理解に結び付く教育的活動を行う「いのちの博物館」と言えます。

レクリエーションの場でもある動物園では、展示を難しく捉えるのではなく、動物との出会いを通して、子どもは子どもの感性で、大人は大人の関心と知識で楽しみながら何かを感じ、分かってもらうことで一定の教育的な役割を果たしています。

来園者に、より効果的・効率的に多様な学びや刺激を提供する工夫は、動物園づくりにとって大切です。大森山動物園は、年齢や価値観も異なる来園者への教育的サービスを重要なものと捉え、様々な視点、テーマ、手法で力を注いできました。これまでの50年を振り返ると、教育活動を大上段に振りかざすのではなく、動物園がすべき自然の所作として行ってきたように思います。

明確に記録が残るのは、開園3年目の1975年に始めた一日飼育体験のサマースクールで、これは実際に動物と向き合う体験であり、仕事の大変さを体感するキャリア体験のようなものです。その2年後には動物を目の前にし、身近で生命を感じながら絵筆を取る写生大会も始まりました。写生大会は、秋田市造形教育研究会と秋田テレビとの共催で大森山動物園の代表的イベントとして大きく発展した教育プログラムになっています。



サマースクール

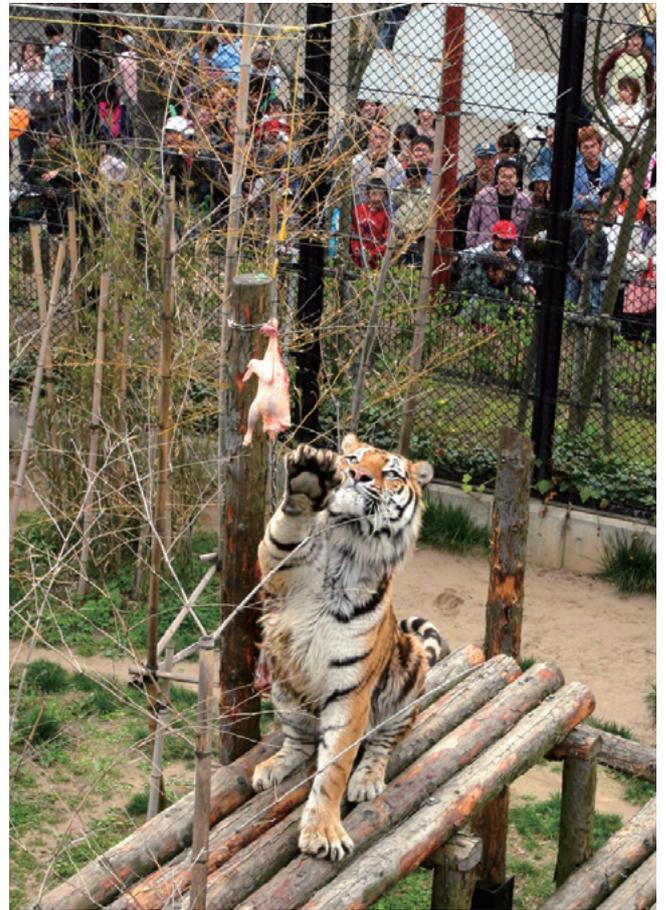


親と子のふれあい写生大会

こうした対象者限定の活動とは違ったサービスが始まったのが1980年代後半からでした。夏休みを中心に行われた「動物園親子教室」での動物の食事風景見学会、土日限定で手作りの囲いで行った「動物ふれあい教室」など一般来園者向けサービスが徐々に始まりました。これらは現在行っている「まんまタイム」や「エサやり体験」、「ふれあい教室」など教育的なサービスの原点でした。

来園者が動物園を楽しむ時、飼育員の解説やパフォーマンス

スによってぐっと動物が身近になっているように見えます。実に効果的なサービスといえます。こうした活動が盛んになったのは「王者の森」完成後の2003年頃からです。トラやライオンの「まんまタイム」は大きな反響を呼び、2004年の日経トレンディの「行ってみたい動物園」の全国4位に選ばれました。以後、飼育員は様々な工夫を重ねて大森山の定番イベントに成長させてきました。



トラのまんまタイム

こうしたイベントに加え、ウルトラクイズ、ウォーククイズなどを開催し、楽しみながら学ぶサービスを考案しました。ウォーククイズでは獣医師が「ヒントマン」に変装して登場したほか、飼育員有志で結成した「アニマル戦隊ミルヴェンジャー7」の寸劇も来園者を大いに楽しませました。



ウォーククイズ



ヒントマン



ミルヴェンジャー7

これらのパフォーマンスとは別に、2013年頃には飼育員の発案で手作りのユニークな動物解説板「どうぶつ学ぼーど」も来園者に好評で今につながっていますし、動物の健康管

理をありのままに見せる動物トレーニングの解説や「飼育の日」のイベントなども着実に成長してきた教育プログラムといえます。

また、来園者と動物の距離をできるだけ縮め、本物の動物を感じてもらうことも大事に取り組んできました。2007年頃から始まった、春と秋の動物ふれあいフェスティバルでの「動物パレード」は、人工育雛したイヌワシやフクロウ、インコなどを飼育員が手に乗せ来園者の目の前で観察してもらうサービスです。動物教育の始まりであり、動物園ができる教育サービスの原点ともいえます。感じ、知ることで人は興味を示し、動物を愛し、その保護にもつながります。

こうしたサービスとは異なりますが、野生動物保全に携わる関係者に参加いただいた公開シンポジウムなどもしばしば開催されました。2008年には園内のゼニタナゴの保全活

動を、2014年には環境省と一緒にイヌワシの未来を語る会など、2017年には高病原性鳥インフルエンザの発生を受け、その原因を考えるトークイベント「鳥を語る」なども来園者を変え行ってきました。

このほかに、地域の学校の教育プログラムに組み込まれた「飼料作物の栽培体験」、各学校向けの小動物との「ふれあい教室」、自然科学学習館とタイアップした「どうぶつサイエンス」、さらには近隣にある秋田公立美術大学との連携による「大森山アートプロジェクト」などで学生とともに動物園でのアートや芸術活動を進め、楽しく学べる場づくりにも力を入れてきました。

多様な教育サービスを作り、工夫し、実践することは大事な仕事であり、動物園の存在理由でもあります。



どうぶつ学ほーと



どうぶつパレード



トークイベント「鳥を語る」



どうぶつサイエンス



ユキヒヨウのトレーニング



ソウさん堆肥を使い、地元の小学生と飼料作物(スタックス)を栽培



ソウさん堆肥を使って栽培した飼料作物(スタックス)をソウにプレゼント



ふれあい教室

## 支援・応援で 成長してきた動物園

2016年3月から大森山動物園は、株式会社秋田銀行がネーミングライツ・パートナーとなり「あぎんオモリンの森」の愛称が付けられています。同行から提供されたパートナー料収入はスタッフの展示環境改善アイデアの実現に有効に活用されています。動物園をパートナーに選んでいただいた理由は、動物園の入園者数が近年27~28万人と安定し、なによりも家族連れを中心に市民県民から愛され続けていることかもしれません。



ネーミングライツ看板除幕式

このような支援とは別に、大森山動物園は多くの市民や企業から支援、応援をいただきながら成長してきました。

その一つがボランティア活動です。50年の歴史の中、参加の動きが出てきたのは開園30年前後でした。義足のキリン「たいよう」が話題になり、チンパンジーの森や王者の森が完成し動物園のイメージが大きく変わり始めた頃でした。動物園を楽しみながら何かの形で関わってみたいと思う人が現れたのです。



ボランティアガイドのみなさん(制作を手伝った50周年記念モニュメントの前で)

動物園のガイドをしたいと思う人たちは、2002年にボランティアガイド「たいようの会」を発足させ、花壇づくりが好きな人たちは「MYZOOガーテナー」として園内花壇の管理をしていただいています。どちらも会員は30名弱のグルー

プですが、熱心に園内活動を続けてくれ、来園者から喜ばれています。



MYZOOガーテナーの活動の様子

こうした園内での支援とは違った形で動物園を応援する団体も登場しました。2011年の東日本大震災の年に発足した「大森山動物園応援会」です。発端は2007年の「地方(秋田)の動物園を考える」シンポジウムで、秋田市は2009年に市民参加型の大森山動物園再整備構想策定委員会を設置、その後役目を終えた委員会メンバーが牽引役になり企業人、教育者、大学教員などと市民と一緒に動物園づくりを応援しようと結成されました。開園40周年の時は公園でのジャズフェスタ開催や園内へのアート作品設置支援などのほか、飼料用のリンゴ拾いなど様々な応援を続けています。

動物園への飼料の支援もありがたいものです。こうした支援が多くなってきたのも開園30周年の頃からでした。市内製パン会社、食品会社、果樹園、また個人の方々から支援をいただいています。入園ゲート近くにお名前の掲示をさせていただいていますが、その輪が少しずつ広がっています。

こうした飼料の支援とは別に、秋田中央塗装業組合や日本塗装工業会秋田県支部のみなさまの30年にも及び園内施設の塗装ボランティアも施設の維持管理のうえで本当にありがたいものです。

様々な支援、応援に対し感謝の思いを表しつつ、支援は動物園への期待の大きさであることを意識し、それに応える努力を忘れてはいけないと感じています。



応援会会員のみなさんでリンゴ拾い

## 連携・つながりの力

**動** 物園運営には前述の支援、応援が大きな力になってきましたが、これとは別に企業等とのつながりも力になっています。

一つは動物園の歴史とともに歩んだ園内遊園地(運営企業)との連携です。遊園地は大森山公園建設と深い関わりがあり、現在の大森山公園は以前、地元住民の田畑でした。秋田市は公園と動物園の建設用地として土地を譲り受けましたが、一部の人は観光会社を立ち上げ、開園後に園内にレストランや遊園地営業を始めました。以後、動物園と遊園地は一体となり大森山の顔としてともに賑わいづくりを担い、レクリエーションの場を提供してきました。ところが2007年に諸事情で遊園地は営業を終了、秋田では大きな話題になると同時に閉鎖の影響も心配されました。幸いにも大阪の遊具設計企画会社が事業を継続し、現在の「大森山ゆうえんちアニバ」として営業を再開してくださいました。老朽化した遊具の再整備に加え、新機種導入、さらには動物園50周年の節目に観覧車の更新もしてくださり、大いに話題になりました。遊園地は動物園とともに子どもの夢を育む大事な場として存在しています。



アニバの新観覧車「フルール」

もう一つのつながりは、東北の日本海側にある鶴岡市立加茂水族館、秋田市大森山動物園、男鹿水族館GAOが連携し利用者の流れをつくりだそうという試みです。3園館が力を合わせて宣伝し、大きなカタマリとなり利用者呼び込むことを目標に2013年から連携が始まりました。



3園館連携のポスター



3園館連携10周年を記念して、地元小学校へ出前授業を行いました(左から、インコの解説、ヒトデとふれあい、クラゲを観察)



3園館連携協定書への署名式

各園館の代表動物を登場させ、「クラゲ・イヌワシ・シロクマライン」と名付けスタンプラリーなどを実施してきました。異なる経営主体の連携、協力体制は簡単ではありませんが、今後の発展が楽しみです。

少し変わった連携で課題解決をした例もご紹介します。動物園の課題の一つに動物の排泄物処理があります。量の多い草食動物は処理に大きなコストが必要になり、下水等での処理が難しいものです。そこで畑への有効活用を目指し本格的に堆肥化を検討しましたが、動物園の力だけでは難しく秋田県立農業短期大学(現県立大学)に相談し、様々な方策を検討



ゾウさん堆肥

した結果、有機物の発酵分解力の強いバクテリアが有効と分かり、堆肥事業を実施する会社と共同開発し、完成した堆肥を「ゾウさん堆肥」と名付けました。2012年頃「ゾウさん堆肥」は商品化され、現在は販路も定着し、一部のJAや農家、有機農法で米をつくる団体、多くの家庭菜園で利用されています。

また、企業等からの企画提案事業では、動物園の人気動物と50周年のロゴをプリントしたトラックを運行して下さる企業も登場しました。

動物園は様々な連携と関わりを大事にしながら動物園づくりを進めてきました。



動物たちがプリントされたトラック

## 秋田公立美術大学と動物園

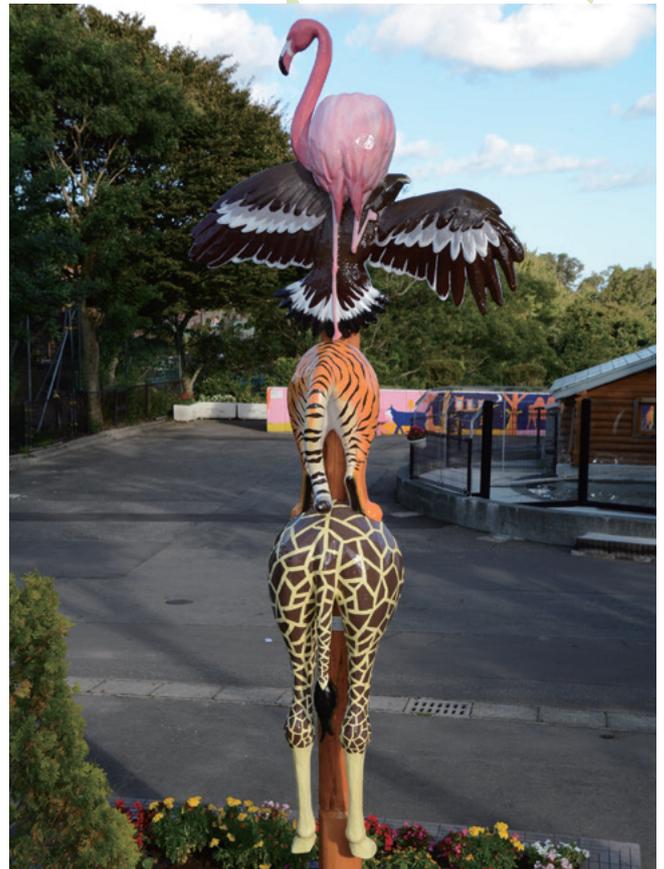
**秋**田公立美術大学(美大)との連携の始まりは秋田公立美術工芸短期大学(短大)時代に遡ります。2007年、同短大に赴任したばかりの若い先生からの「短大と動物園が連携し、研究や教育で何かできないか」という熱心な投げかけがきっかけでした。動物園を美術の力でもっと豊かな環境にしてみたいという強い思いを感じ、動物園側も学生の作品づくりや作品審査などで大学に何度も出向きました。若い学生の提案を活かす方法を模索していたところ、幸いにも動物園近くの西部工業団地・雄渾会が資金提供を快諾してくださり、翌年には園内案内看板の制作演習が行われました。優秀作品は動物園への設置が実現し、今も入園ゲートに入って左側に設置され活躍しています。それから16年、連携は受け継がれ発展してきました。

その後、短大の研究と歩調を合わせることで動物園は様々な成果を得ることができました。動物園へのアプローチ道路に設置されたアートボード、動物園のイメージキャラクター「オモリン」の制作など学生の様々なアイデアは、動物園を彩り、発信につながっています。

2015年、秋田市では前年開催された国民文化祭を受け、アフター文化祭事業の庁内アイデア募集があり、動物園は美大との連携事業を提案し予算化されました。「大森山Arts&Zoo」は動物園が資金を提供し、大学は学生や教員の力で動物園のアート化を図る事業でした。動物園と大学と一緒に実現可能なアイデアを選考し、年度ごとに展示作品が増え、動物園のアート化が進みました。

美大とのつながりはその後、「大森山動物園アートプロジェクト」に発展し、大森山公園にも活動の場を広げながら、人と自然、生き物との関わりを持たせた芸術活動となりました。

大森山アートプロジェクトは、園内誘導サイン「おしりでごんには!」や新たなサル舎建設に合わせ制作したサルの生態・



おしりでごんには!

進化を表す壁面アート、新屋の街から大森山公園に誘導する屋外アートとして、JR新屋駅構内や新屋ガラス工房入口、大森山公園写真スポット「I LOVE ZOO」などの作品設置を精力的に進めていきました。そして、開園50周年を祝い2023年3月に、台湾大同大学や韓国ソウル梨花女子大学も参加した作品コンペにより誕生した作品が入園ゲート周辺に登場しました。

動物園は美大とのつながりの中、他の動物園にはないアートを取り入れた動物園に成長しています。それは動物園にはない感性を、大学や学生とのつながりの中で取り入れることで生まれました。



サル舎内にある壁画



I LOVE ZOOは新たな撮影スポットに



JR新屋駅でオモリンがお出迎え



ピクニックをモチーフに楽しい動物園を表した「Oh happy day」(50周年記念モニュメント)



開園50周年を動物の音楽隊がお祝いする「The song of life」(50周年記念モニュメント)

## 新しい動物公園づくり

**戦**後すぐの1950年に誕生した県立児童動物園は、その後、秋田市に引き継がれましたが、1969年の市制80周年の新しい公園計画により、「こどもの国」としての大森山公園へ移転し、1973年に公園と動物園が誕生しました。

市民の声を取り入れ、市制100周年記念事業の一つとして、1991年にゾウとキリンを導入しました。1997年には「ふれあいランド」が完成し、現在の動物園のカタチは開園から約25年の時を経てできあがりました。

開園後、30年を経過すると施設の老朽化とともに動物や動物園に向けた社会の意識も大きく変わり、ハードの再整備の動きが少しずつ始まりました。

それに合わせ動物園の様々なソフト的な活動も活発化し、動物園について多くの人が考えるようになり、それは2005年の「大森山動物園条例」の制定に結びつき、動物園の存在意義を内外に示すことになりました。

2007年には秋田出身の作家、西木正明氏のコーディネートで各地の動物園長、経済学者、生物学者、子育て中のお母さんが参加し「地方(秋田)の動物園を考える」シンポジウムを開催し、それは2009年の市民参加型の「大森山自然動物公園整備構想策定委員会」に発展しました。2010年3月に市は「大森山自然動物公園(仮称)整備構想」を発表、1969年の大森山公園

建設計画から約40年が経過し大森山公園と動物園が融合した自然動物公園の考えに発展しました。

コンセプトには自然との調和、市民とともに成長し続ける自然動物公園への願いが込められています。アートも取り入れ、市民や企業とともに発展させながらの再整備という新しい考え方も盛り込まれましたが、「こどもの国」に盛り込まれた「人間形成の場」の思いはアンカーのようにどっしりと残っています。構想は2017年に改定され、2021年7月には「大森山公園整備基本計画」に具体化され、少しずつですが、自然動物公園への思いを広げるために整備が始まっています。

計画の内容は市内が一望できる展望台から豊かな自然の森の中に遊び、大森山に生息する生き物たちを間近に観察しながら公園を楽しむ工夫がこらされ、動物園を核にして、自然豊かな公園と動物園の往来や回遊を楽しんでいただこうとするものです。

現在、公園との回遊性づくりの第一歩として動物園の南端から公園に入り込むアプローチ園路の再整備が始まり、大森山公園の自然と動物園の往来、回遊を象徴するゲートの整備も計画されています。

自然の中、遊びながら動物とふれあえる全国でもユニークな「大森山自然動物公園(仮称)」を次世代の人々の手で完成してほしいものです。その名称も新しい秋田の文化を象徴するもので動物園という言葉に固執する必要もないと思います。市民みんなで考えてもいいかもしれません。



大森山公園の空撮写真(中央の白い建物が動物園ビジターセンター)

# 未来に向けて ～飼育員からのメッセージ～

飼育展示担当(飼育員)から未来の大森山動物園に向けてのメッセージです。数年後、数十年後はどんな動物園になっているのでしょうか。飼育員一人一人の思いを集めました。

参事(獣医師) 三浦匡哉

これまで個人的に、大森山動物園で30、40、50周年を迎えてきました。その時々で仕事や立場は違えど、お客様に喜んでいただける動物園になるよう取り組んできました。

動物園は自然や野生動物について知ってもらう窓口としての役割があります。野生動物の現状を多くの人に知ってもらい、人も動物も無理なく共存できる世の中にするためのお手伝いをしています。

これからも多くの方に必要とされる動物園となるよう、職員一丸となって頑張りたいと思います。

## 主な担当動物

1 班

ヤギ、ヒツジ、カピバラ、  
ペンギン、レッサーパンダ、  
ウサギ、モルモット、カンガルー、ポニー

主席主査(獣医師) 高橋 拓

命の大切さを感じられる、やさしさを持ち一人一人が自ら考え行動できる「ふれあい教室」を目指して頑張っています。

主席主査 山本留美子

「ふれあい教室」や「なかよしタイム」を通して、かわいいだけじゃない動物の持っている魅力や、命の大切さなどを子どもたちに伝えられるよう、頑張ります。

技能主査 國井 博

全国から何度でも来園してもらえるような素晴らしい大森山動物園にしたいです。

主任(動物専門員) 阿比留優一

動物たちに寄り添ったスタンスで臨み、皆さんから信頼のある飼育員、動物園を目指していきます。

技師(動物専門員) 櫻庭美千代

レッサーパンダをもっと楽しく学べるよう工夫し、ひなたと円実がうまく繁殖できるようにしっかりとサポートしていきたいです。

会計年度 長谷川 宗

カンガルーの繁殖に力を注ぎ、赤ちゃんの姿をお客さんにお披露目することが目標です。

2 班

ゾウ、ヤマアラシ、  
フラミンゴ、コツメカワウソ、  
マーコール、プレーリードッグ



主席主査 山上 昇

どんな天候でもイベントができるよう全天候型イベントドームのような施設を作れたらもっとみなさんに楽しんでもらえるのではと思う今日の頃です。

技能主査 藤原直樹

来園者が心身ともに癒やされる動物園にしたいです。

主任(動物専門員) 堀籠麻子

動物や来園者、そして自分自身もほっこりできる場所にしたいです。皆さん一緒に動物園をつくっていきましょう!

主任(動物専門員) 奥山麻裕子

動物が一生を終えるまで、ストレスなく暮らせるよう責任を持ってサポートしていきたいです。

主任 藪崎雅紀

飼育員1年生ですが早く仕事を覚え、ご来園の皆さまや動物園関係者と協力しながら、未永く愛される動物園にしていきたいです。

技師(動物専門員) 齊藤光貴

動物たちの幸せな生活をお客様にとって幸せな空間を作っている、そんな飼育員になれるように精一杯頑張ります!



## 副参事(獣医師) 高橋広志

私は、県外出身ですが、初めて大森山を訪れた時に、展望台からの風光明媚な眺望に心魅かれたこと、園のゲートをくぐり、動物園という非日常の雰囲気ワクワク感や珍しい動物たちとふれあえる喜びを感じたことを覚えています。

今後その美しい自然や景観、動物園での体験を通じて、秋田市民や訪れる皆様が大森山動物園を誇りに思い、秋田市の魅力を再確認できる場所、そして癒される場所にしていきたいと思います。

## 主席主査 宇佐美均

今から34年前の平成元年に動物園職員として働き始めました。

その時はアフリカゾウの来園が決まっていたこともあり、配属早々にゾウと野生動物の飼育研修のため、2か月間四国の動物園へ行きました。そこは、自然界を思わせる見事な展示手法と飼育員の動物に対する愛情あふれる姿勢が素晴らしい動物園でした。

当園も50周年の節目をむかえ、様々な点で大きく変わりましたが、これからも動物と飼育員が、ともに健康で生き生きとした環境にあり、お客様の笑顔があふれる動物園であり続けたいと思います。

### 3 班

キリン、ライオン、トラ、  
ユキヒョウ、オオカミ、アシカ、  
イヌワシ、ビーバー、トナカイ、テン

#### 主席主査 柴田典弘

動物の幸福な暮らしを実現するために、残された飼育人生を捧げます。

#### 主査 佐々木祐紀

本州で初となるシマフクロウの雌雄の見合い・同居・繁殖を試みます。自分にとっても貴重な経験であり、より良い環境作りができるよう頑張ります。

#### 主任(動物専門員) 千葉可奈子

動物たちを通して出会えた様々な出会いに感謝し、50周年を迎えたこれからも、全国のみならず愛される動物園でありたいと思います!

#### 主任(獣医師) 湯澤菜穂子

大森山の動物たちみんなが、元気に長生きできることを目指して、今後も日々のサポートを頑張ります!

#### 技師(動物専門員) 宮原 星

動物園の中だけでなく、身近な自然にも興味を持っていただけるようなイベントを頑張っていきたいです。

#### 技師(動物専門員) 鈴木 幸

これまでイベント等に参加出来ていない動物たちの魅力発信のため、解説や新たな展示物の作成・掲示に力を入れたいです。

#### 技能員 佐藤 正

大森山動物園にお世話になって、早いもので20年過ぎようとしています。これからも、動物園の発展を願っています。

#### 会計年度 黒石涼太

動物が過ごしやすく、その動物の特徴を見せられるような環境を作り、トレーニングや動物の繁殖にも力を入れたいです。

### 4 班

チンパンジー、ニホンザル、  
フクロテナガザル、イグアナ、リス、  
ラクダ、キョン、エミュー、クジャク

#### 主席主査(獣医師) 小川裕子

飼育動物がより快適に安心して過ごせる環境と来園者に発見や驚きを感じてもらえるような展示を日々模索していきます!

#### 主査 鈴木昌典

「ハンドルをデッキブラシに持ち替えての作業。流れる汗が気持ちいいです。今度焼肉でもどーですか?」20数年前に初めてコミュニケーションに書いた自己紹介文です。ふざけてますね。当時と動物園は大きく変わりました。これからも、もっと楽しい動物園へと変えて行きましょう~!

#### 主任(動物専門員) 関谷藍子

子どもも大人も、動物たちからたくさんのことを学べる、自然学校のような動物園づくりを目指します!

#### 主任(動物専門員) 館岡幸枝

大森山の50年を見てきたチンパンジーのボンタが元気なうちに、チンパンジー展示場に植樹をして森にしたいです!

#### 技師(動物専門員) 牛越利之

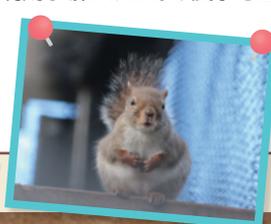
お客様と動物達を中心に、アートと音楽、秋田愛にあふれ、ゆったり遊べて、しっかり学べる動物園にしたいです。

#### 技能員 泉弘美

チンパンジーの担当者として、すごく長生きをしているボンタに携わり今後、ボンタがさらに長生きできるようにサポートしていきたいです。

#### 技能員 斎藤 勇

多くの先輩たちから学んだ展示場整備の技を受け継ぎ、自然木などを利用し暖かみのある展示をこれからも続けていきます。



# 50周年

## イベント レポート

開園50周年を記念し「ありがとう50年～つながり、ともに未来へ～」をテーマに、これまで動物園を支えてくださった皆さんに50年分の感謝を伝えたい、今まで築いてきたつながりを大切に、ともに未来へ歩んでいきたいという思いのもと、1年を通して様々なイベントを企画しました。その一部を紹介します。

※次号No.107号でも詳しく紹介予定。

3/18

### 50年目の通常開園スタート

開園セレモニーには、穂積市長や高木美保名誉園長も参加し、ネーミングライツ・パートナーの秋田銀行様からは来園者へお菓子のプレゼントをいただきました。



開園セレモニーで



今回で退任となった高木名誉園長へ花束と記念品の贈呈を行いました

4/29

5/7

### ゴールデンウィーク特別企画

### 「今でも記憶に残る動物たち」

ゴールデンウィーク中の特別企画として、1973年の開園からこれまで、動物園を盛り上げ、お客さまから愛された動物たち16種類をピックアップし、来園者による投票でナンバー1を決定しました。



1位に選ばれたシンリンオオカミのシン

5月

10月

### 50&25!大森山動物園・新屋図書館コラボ企画



図書館が動物園に出張!



本で読んだ動物が目の前に!

移転開館25周年を迎えた新屋図書館とコラボイベントを開催しました。第1弾は園内で絵本の読み聞かせや本の貸し出し、第2弾は本に出てくる動物を実際に見学するツアーを行いました。今後は、第3弾として飼育員がおすすめする動物に関する本の展示を行うほか、第4弾として飼育員と本を通じてお話するイベントの開催を予定していますので、ぜひご参加ください。

6/4

### 春の動物ふれあい フェスティバル

悪天候が予想されたため4年ぶりの動物パレード復活は叶いませんでしたが、その代わりに動物との記念撮影会を開催しました。また、50周年にちなみ、5種類の動物の羽、角などを使ったアクセサリー作り体験を行いました。



トナカイの間近でピース♪



ストラップ上手にできました!

## 開園50周年記念 メインイベント

9/1

### 開園記念日

(入園料200円引きで530円)

◎動物やおモリンによるお出迎え

◎動物園の思い出の写真で作るモザイクアート作品お披露目

◎思い出の写真展(～11月30日(木)まで)

◎大森山動物園今昔ものがたりパネル展(～11月30日(木)まで)

6/18

## 開園50周年記念キャラバンin加茂水族館

3園館連携を行っている加茂水族館(山形県)に、当園の動物たちがおじゃましました。ジャンボウサギやモルモットなどが参加し、来館者の皆さんと交流して50周年のPRをしました。



アカコンゴウインコのメレもごあいさつ



動物たちの解説も行いました

7/15

8/6

## 第46回 親と子のふれあい写生大会

50周年を記念し「未来の動物園を描こう」をテーマに、実際に動物や展示場を観察しながら未来の動物園を描いてもらいました。提出された243点の作品の中から、秋田市造形教育研究会による審査で42点の入賞作品が決まりました。



秋田市長賞  
秋田市立土崎小学校6年  
鈴木 結翔  
「こんな近くで見れたらいいな」



秋田市議会議長賞  
ノースアジア大学附属のびのびこども園  
古谷 衣知夏  
「『ミラクルにんじん』ジャンプ！」



秋田市教育長賞  
由利本荘市立岩城小学校4年  
高橋 悠  
「みんなでエサやり モグモグタイム」



開園50周年記念賞  
横手市立朝倉小学校3年  
森屋 杏香  
「自然あふれる動物園」

8/2

## 動物園があなたの夢叶えます -動物とつながるSpecial day-

大好きな動物の担当飼育員になって、1日お世話を体験。普段はできないバックヤードでの作業や動物トレーニングなど、貴重な体験ができ、参加者の皆さんは満足げな様子でした。



鳥を腕に乗せて散歩体験も



園路にテントを張ってキャンプ

7/25

7/26

## 第49回 サマースクール ~未来の飼育員は君だ!~

大森山動物園で最も歴史のあるイベント「サマースクール」を今年も開催しました。今年は44人が参加し、園内を探検しながらクイズに挑戦するフィールドワークや飼育体験などを行いました。



ペンギンの飼育体験

7/28

7/29

## 大森山動物園ナイトキャンプ

動物が寝静まった夜の園内でキャンプを行いました。ガイドツアーやキャンドル作り、スイカ割りなどを楽しみました。

9/2

- 開園50周年記念式典 感謝状贈呈、写生大会表彰式、小松園長による講演、動物園の未来を考えるパネルディスカッションなど
- 特別イベント「アニマル応援隊☆学んで作ろう!オオカミがよろこぶ手ZOOくりアイテム～」

9/3

- 特別イベント 「開園50周年記念特別キーパーズトーク」 「50th大森山ウルトラクイズ」

# 飼育日誌



(令和5年1月1日～6月30日)

1/6	フタコブラクダ	同居後すぐに福みが幸♀の後肢と背中を噛む。
1/8		猛獣舎ボイラー：一部故障 ライオン側停止
1/12	ベニコゴウインコ	巣箱に1卵有り。(6卵目)
1/21	アフリカゾウ	ジェットヒーター試運転。
1/28	アビシニアコロブス	レイア♀ 妊娠か?腹部やや膨らむ。
2/2	キリン	リンリン♀ パドックオープン放飼中滑って転倒。すぐに起き上がる。
	フタコブラクダ	幸 Bw142kg (前回1/4(121.7kg)から+20.3kg)
2/6	ニホンイヌワシ	(第2ペア) 17時頃、モニターにて1卵産卵しているのを確認する。
2/19	キリン	リンリン♀血圧測定実施(成功)
2/21	サル山	一週間前頃から園内に居た野生の親子サルの親♀と思われる死骸がサル山内にあり。
2/27	クマ	ルビー♀ 冬ごもり確認。頭を上げる。水補給。
2/28	ニホンコウノトリ	1卵目産卵。
3/1	マーコール	3カ月ぶりに♂♀同居。
	エリマキキツネザル	カイン♂:ナッシー♂から攻撃されるため床面から上がれない状態。しばらくケージ内に隔離して経過観察。尾の先端皮膚欠損部、イソジン消毒。
3/6	シバヤギ	丞武♂ 起立補助、歩行不可。
3/8	ツキノワグマ	室内糞出し消毒。
3/15	ケツメリクガメ	窓の断熱材両面撤去。
3/18	ニホンイヌワシ	西目♀ 抱卵安定せず採卵(孵化しない1卵と交換)。西目の卵2卵をたつ子ペアに移入する。
3/22	マーコール	交尾確認。
3/24	アムールトラ	シュウ♂ 展示訓練開始。
3/25	ニホンイヌワシ	(第1ペア) 午後1卵、嘴打ちと思われる様子あり。
	キリン	体重測定。
3/28	ニホンイヌワシ	第1ペア:雛の位置が悪いため入室して巣材を整えた。2羽目の雛を第2ペアへ移動
	トナカイ	しなの♀右角落角。両角落角完了。
3/29	ジャンボウサギ	子4頭完全に開眼し、クローバーの採食も確認(生後17日目)
4/4	ファンボルトペンギン	室内巣Aヒナ 時折、親の腹下から出てきて行動する。
4/8	キリン	恵太♂ 角当て活発化。
	アムールトラ	シュウ♂ 展示訓練。
4/11	シバヤギ	広場内に角が落ちていた。個体不明。
4/13	カナダヤマアラシ	換毛始まる。
4/20	アフリカゾウ	リリー♀ 横臥睡眠無く周回行動のみで落ち着きなし。
4/22	アフリカゾウ	直腸輸液練習嫌がる。

4/25	アカカンガルー	♀2頭(みかん、ジェラート)を♂群に移動。
	ライオン	ローア♂ 両大腿部の床擦れの発赤が目立ち、歩き方がぎこちない。爪の過長?
4/27	フラミンゴ	終日放飼。
	ブレイリードッグ	仔4頭開眼。
4/28	ブレイリードッグ	親子寝室目隠し外す。
4/29	ブレイリードッグ	ルーク♂ タヌキ展示場に落下。
5/4	カナダヤマアラシ	交尾行動取るが拒否される。
5/5	ミニブタ	午前中てんかん発作4～5分続く
5/8	ニホンコウノトリ	擬卵撤去、巣板設置。
5/9	アムールトラ	シュウ♂ 展示訓練再開。
5/10	マーコール	ゆべし♀ 削蹄。
5/16	チンパンジー	ジェーン♀ 右足先かなり腫れている。
5/19	ファンボルトペンギン	右紫青黄(1才):トローバン挿入。外巢⑥擬卵回収。
5/26	ファンボルトペンギン	(3/24生まれ):巣立ち。63日齢
5/27	ニホンイヌワシ	(第2ペア)第2ヒナ巣から飛び出す。
5/28	ファンボルトペンギン	(3/22生まれ):67日齢で巣立ち
6/1	ブレイリードッグ	仔4頭の性別チェック ♀3,♀1
	ファンボルトペンギン	若齢個体:翼帯取付。
6/2	フタコブラクダ	幸♀ 両前肢球節過伸長、トレーニング開始し、採血やバンテージ処置できるようにする。
6/3	アカカンガルー	スミス♂×みかん♀交尾確認。
	トナカイ	ルミ♀ 午後5分ほど仔の授乳確認。牛初乳用粉ミルクの哺乳開始。
6/4	アカコングウインコ	メレブ♀ 嘴整形実施。
6/5	ユキヒョウ	ヒカリ♀ 展示場内に入り込んだヒヨドリを捕食。
6/6	ニホンイヌワシ	保全種風除け除去。イヌワシ(第1ペア)鳥インフルエンザ網一部除去。
6/8	トナカイ	親子展示訓練(初日) トナカイの仔命名:雨瑠(ウル)
6/11	ユキヒョウ	アサヒ♀ トレーニング下においてワクチン接種実施。
	オカメインコ	嘴根元に腫瘍あり。
6/12	ラマ	アンナ♀ ヒロ♂との唾の吐き合い後休息。夕方給餌後はZC・Mazuri採食確認。
6/13	タンチョウ	八角ツル舎(タンチョウ)防鳥ネットはずし。
	ニホンイヌワシ	(第1ヒナ)79日齢で巣立ち確認。
6/14	マナヅル	八角ツル舎(マナヅル)防鳥ネット外し。
6/15	キョン	ノゾム♂ 落角。
6/16	ニホンイヌワシ	(展示場ヒナ)巣台に戻る。
6/17	ヒツジ	毛刈り実施。
6/18	ライオン	マンゴー♀ 採食不良。抗生剤投与(吹き矢)
6/19	カリフォルニアアシカ	アイラ♀の発情兆候を確認→観察下での同居、交尾確認、分離まで完了。
6/20	ジャンボウサギ	性別チェック(♂1♀3)
	ニホンコウノトリ	産卵確認。卵と巣材撤去。

## お客さまの声

- 家族みんな動物大好きで、コロナに注意しながら去年行きました。今年はコロナを気に3/19しないで、イベントにたくさん参加する予定です♪ 娘の将来の夢が、飼育員なので動物だけでなく飼育員さんのことも見て、勉強していました。
- 4/1 サル舎は、中からも外からも展示を楽しめました。ガラスもきれいな上に、建物がお洒落でした。
- 5/11 ままタイムや解説、とても身になりました。動物園に来たからこそこの体験ができて満足です!
- 5/21 子ども(3才)がチンパンジーが大好きで毎週来ています!色々な表情をみせてくれるチンパンジーがとってもかわいいです。
- 6/4 もう園に来るようになって数十年…いつも変わらず楽しませてもらっています。これから楽しい園であり続けて下さい。
- 6/9 子どもがまだ小さい時に来たきりだったが、ものすごく変わっていて楽しかった!!また来たい。結構ふれあえたり、すごく近くで見られたりして良かった!!

## かたばた通信

記念誌発行のため50年の歩みを振り返ると、さまざまな人や動物たちが動物園を支え、今に繋がっているのだと改めて実感しました。

また、これまでも動物園を取り巻く環境や施設の変化などはありませんでしたが、来園者を楽しませたいという職員の思いは開園当初から変わっていないように思います。限られた誌面の中で50年分の歴史は伝えきれない部分もありますが、少しでもその思いが伝わっていたら嬉しいです。

この先、どのような未来が待っているかわかりませんが、大森山動物園がより多くの人に愛される動物園であり続けることを願います。(保坂)

発行/秋田市大森山動物園

〒010-1654 秋田市浜田字湯端154番地 TEL 018-828-5508 FAX 018-828-5509  
E-mail ro-inzo@city.akita.lg.jp デザイン・印刷/秋田活版印刷株式会社

●動物取扱業者 秋田市長 穂積 志 ●事業所及び所在地 秋田市大森山動物園 秋田市浜田字湯端154番地  
●登録に係る動物取扱業の種別/販売:動-3-41 貸出し:動-3-42 展示:動-3-43  
●登録の年月日/2007年6月1日 ●有効期間の末日/2027年7月31日 ●動物取扱責任者/山上 昇 高橋 拓

大森山動物園

検索

<https://www.city.akita.lg.jp/zoo/index.html>